

森美術館は高い場所にある。地上 53 階、230m らしい。観ている時は高さなんて、意識してないけど、日本で一番高い展示空間らしい。そんな空に近い森美術館で star 展を観た。star とは何か。インターネット辞書で検索してみると、①星、天体(中略)④有名人⑤主役、主演 ⑥(ある分野の)成功者と出てくる。

これらに共通する要素は「外からの視点」である。地球に住んでいると、自分が住んでいるのは星だと考えにくいし、自分 1 人で俺は有名人だ！主役だ！といっても意味がない。そんな風に他者からの視点から定義される。それがスターである。

「外からの視点」は、この展示のサブタイトルである「日本から世界へ」というコピーも示唆的であり、また根源的に言えばアート自体が持つ異化効果を端的に表しているとも言える。

6 人が持つ共通性は？という回答として暫定的に導き出される答えは外に飛び出すことである。作家 6 人がスペースで区切られているように（逆に横浜トリエンナーレが作家の区分けが不明瞭であったことには精神的、粒子的視点にたった作家性の否定が存在すると考える）アプローチは異なるにしろ、外に飛び出している気がする。それは、あるときは告発であり、あるときは形而上のものを肉体に下ろす作業であり、ある時は精神の開放であり、ある時は感覚の異化である。そんな簡単に 6 人の作品を構造化することは軽薄なのかもしれない。しかし、スターであることとは、勝手に憧れられ、勝手に失望される存在になることと同義なのである。

今回の美術館演習に向かうにおいて私は作家/作品の文脈的をほとんど知らない状態で臨んだ。それは認識論的には、言葉を持たない赤ちゃんと同じである。赤ちゃんが幸福感/不安感という根源的感情しか持たないように、私も作品に触れる際に多くの精神的感情を持ち得ない。しかし、アートの世界が有史前との接触を図るように私も根源的感情を受け入れようと思う。この展示は抑圧的不安と、それからの解放の連続であった。ある作品を見ている時、私は溺死するのでは無いかと思うほどの嫌悪感に襲われ、別の作品を見ている時は現実には味わうことが出来ないはずの暖かさに包まれた。それは宇宙を漂う飛行士のような感情であり、このインターステラな旅の擬似体験であった。

私たちが日々タイプキャストされるように作品は、様々な美術的、社会的な文脈の中にて定義付けられる。ある場合にはその文脈は「常識」として鑑賞の前提とされる。

今回の展示会は田中義樹が三重でチェーホフのカモメを見た時の再現を私に強いる。再解釈を元の文脈を知らずに見させられ続けるという感覚だ。しかし、同時に彼が当時味わった感情は文脈的理解の知的なインタレスティングではなくもっと根源的なものであったのだ。そんな点からもこの展示の1つのテーマは文脈/構造になっていると考えられる。展示会場には自宅に持って帰れる文書作品も展示されている。この文書資料には多くの注釈がなされており、基本的には作品のモチーフが記載されている。それによって作品群は文脈化され構造化されている。しかし、その構造化は一種の皮肉にも感じられる。今展示のテーマの1つは彼のデモ開催中の香港での滞在である。デモは中国という市場経済を導入している社会主義国と民主化を目指す運動という文脈と文脈の対立という構造を有している。

また、この展示は1_WALLのコンテスト個展という構造を持っており、(ガーディアン・ガーデンの主催元のリクルートこそ日本社会の資本主義的構造の首謀者であることは言うまでも無い)。

しかしそんな構造の中での展示はまるで、それを真剣に考えるものを笑うかのようである。2台あるテレビの一台は、作家と医者をはべていたはずがなぜかサッカーをしているし、もう一台は彼がライオンと勘違いしていた猫の動画が流れ続ける。そんな動画を見続けていると、彼が文書の中で作り上げた展示展内の構造も文脈も全く無意味なものにも見えてくる。